腐海の謎，母性性をめぐる共存と破壊

“風の谷のナウシカ”（映画版）の心理学的考察（その１）

松　本　行　弘

Ⅰ．はじめに

“風の谷のナウシカ”は，宮崎駿が1984年に製作した長編アニメーション映画である。宮崎は，“少年少女に励ましとなるような映画作り”[1)]を信条としてきた。このアニメーション（以後アニメと略す）では，降りかかる苦難に正面から立ち向かう16歳の少女を主人公に据え，そのファンタジーの中で今を生きる少年少女が，主人公であるナウシカに自己を投影することでこの困難な時代を生きる助けになり，力になることを目指したと思われる。宮崎は，「僕にとって，作品ができあがるまで登場人物たちは実在の人物」で「彼らがどう動くかを神様のように決めるなんてできないし，やりたくない」と言い，主人公と一緒に悩み，考えながら物語を生み出していこうとしている。登場人物には強い思い入れがみられ，物語は，作者・宮崎の中にある少年少女期から思春期のファンタジーそのものと考えることができる。その姿勢が共感を呼び，このアニメに続く“宮崎駿ブーム”となったと思われる。では，その作者のなかに脈々と今も流れているものは何か。

物語の場面は，『かつて人類は自然を征服し繁栄を極めた。だが“火の７日間”と呼ばれる大戦争で栄華を誇った産業文明は崩壊した。それからおよそ1000年，わずかに生き残った人類は，蟲（むし）と瘴気（しょうき）の森“腐海（ふかい）”に征服されようとしていた』[2)]という設定で始まる。そして，“腐海”と人との関係をテーマとして，風の谷のナウシカ，トルメキアの辺境派遣軍司令官クシャナ，さらにペジテのアスペルといった少年少女が織り成す，“腐海との関わりの違い”を横軸に，腐海を調べようと旅を続けるユパ，腐海に触れてはならぬと言うオオババ様など，様々な思いを抱かせる“腐海の謎”が縦軸となって物語が展開する。

“風の谷のナウシカ”が，ファンタジーとして提示され，そこから浮かぶ心の表象を手がかりに，心理学的な立場から解析を試みようと思う。

Ⅱ．物語分析

“風の谷のナウシカ”には原作として漫画本[3)]がある。漫画本はこの映画版を凌ぐような大作であり，物語が違った展開を示すと聞いている（筆者は読んでいない）。そこで二つは全く別の物語と位置づけることにして，ここでは映画版“風の谷のナウシカ”を取り上げることに

する。まず，物語の分析から始め，その後，考察（その２）に移ることにする。

１章．腐海の恐怖と風の谷

物語は，腐海の瘴気漂う彼方からトリウマに跨がった男が現れるところから始まる。男は村の一軒に入るがすでに生き物は死に絶え，腐海の植物が満ち溢れている。村を滅ぼし，住人を骸にする腐海とは何であろうか。前途の暗さを暗示させ，人と腐海の関わりがテーマとなって浮かび上がって来る。

次に，主人公となる“ナウシカ”という少女が現れる。まずナウシカは，腐海を恐れないばかりか，腐海とうまく関わり，それを利用して共存する存在であることが示される。また，風の力と何をエネルギーにしているのか判らないが，自動で飛び上がるメーヴェというタコと中世風でセラミックでできた剣を持ち，文明のアンバランスが背景に示される。これは，大人にとっては非現実的で不合理なことであるが，子どもにとっては魔術的であり夢である。それを操るナウシカは憧れの対象となり，まさに願望を満たす同一視の対象になる可能性を示していると思われる。

ナウシカは，王蟲（おうむ）が何かを追っているのを発見する。そして，トリウマに乗ったあの男が追われて森から現れるのを見て，窮地を救う。ナウシカは，王蟲の回りを旋回し，「目を覚まして，森に帰ろう」と語りかけながら，虫笛の回る時の音を聞かせ森に帰す。ナウシカは，不思議な予感，テレパシーのような能力や催眠術のような暗示を使うことができるようだ。また，人にも生き物にも優しく接し，決断と実行力を持っていることが示された。王蟲とは何か。“怒り”を目の赤色で表現する王蟲は腐海の森に住むが何をしているのであろうか。

ナウシカが助けた男は，一年半ぶりに会う父親の知り合いのユパであった。ユパもナウシカに気付き，「よい風使いになった」「よく風を読む」，そして王蟲を宥めることができたその能力に「不思議な力だ」と感心する。ナウシカは父（ジル）のことを聞かれ，「父はもう飛べません」。腐海の毒にやられて余命幾許もないことを知らせると，「腐海のほとりに生きる者の定めとか…」とユパが答える。

“腐海”の次に“風”が現れる。“風”使いのナウシカ。そして，“腐海”と共に生きることの暗い宿命として，死に対峙し，正面から受け止めなければならない悲劇性が示される。物語の全編を覆う暗さはここから来るのであろう。ナウシカはユパに自分の“秘密の部屋”を見せようと言う。この“秘密の部屋”に“腐海”の宿命から救われる鍵があるのだろうか。

テーマの一つである“風”と“水”が登場する。“風を読む”とはどういうことであろうか。そして，ナウシカの父（ジル）が死の淵にあり，父性をも殺してしまう腐海とはいったい何なのであろうか。今，その腐海が足元まで迫っている。“腐海のほとりに生きるものの定め”，という宿命とは。この宿命に立ち向かうことがナウシカに課せられた定めとなる予感が語られる。ユパは，ゴッドファーザー（名付け親）であり，父を超えた父なるものの一面を担い，ナウシ

カを助けることになる。

城に着いたユパは，病に伏せる国王ジルやオオババ様に会う。ナウシカの母である王妃はおらず，オオババ様と呼ばれる盲いた老女が鍋で食事を作っている。そして，ユパの旅の話しから，「腐海は着実に広がっている」こと，この世は「戦と飢え，不吉な影ばかり」ということを聞く。ユパは「腐海の謎を解きたいと願っているだけ」，「人間がこのまま腐海にのまれて滅びるよう定められた種族なのか」と苦悩を語る。その時，オオババ様が「風の谷は海からの風の神様に守られている」，「ユパは探し続けるよう定められた男」で，壁に掛かったタペストリーの左上隅の人物を指し示し，“古き言い伝え”を語って聞かせる。それは英雄伝説らしきもので，『その者，青き衣を纏いて，金色の野に下り立つべし。失われし大地との絆を結び，ついに人々を青き清浄の地に導かん』と。

ナウシカには母親がいない。母性のない状態で父性もまさに死に瀕している。青年期を向かえる主人公にとって母性性の欠如と父性性の挫折は発達上どのような意味をもつであろうか。物語では，代わりに，オオババ様と呼ばれている老婆が家事をしながら，風の谷に伝わる英雄伝説を語る。このことは，オオババ様が巫女や預言者，あるいはシャーマンのような役割にあると考えられる。それはC,G.ユングのいう元型のひとつである老賢者[4)]に当たるかも知れない。物語は伏線としてこの“古き言い伝え”がどのように完結されるか，それはまさに，失われた大地（腐海）と関係を保ちながら，最後には清い平和な土地に人々を導くことができるか。その導く英雄が青き衣を纏って金色の野に降り立つか。この物語は現代子供版英雄伝説である。

2章．トルメキア軍の来襲

嵐が来ようとしている。しかし，その風は“不吉な風”に感じられ，「風が臭う」と表現される。そこに巨大船が出現する。それはトルメキアの大型船であった。飛び方が異常で，船は谷の外れに墜落する。風の谷は“風”で守られており，風が時間であり空間である。巨大船の出現は，風の谷に外から違う風が吹き始める前触れと思われる。さらに積荷を焼けと言う。積荷に何か秘密があるのだろうか。積荷には次の風が込められている感じがする。

辛うじて平和を保ってきた“風の谷”に新しい風が吹き，その風をナウシカという少女が受け止めることになる。父は動けず，ナウシカの男性性が試されることになる。積荷は“巨神兵”で，既に亡んでしまったと思われる旧世界の怪物であった。これは，人の心の深い無意識に潜んでいる破壊的な攻撃性が象徴化されたものと思われる。これが意識化され現実性を持つことでコントロールできない破壊を日常生活にもたらすことになる。旧世界ではそのコントロールに失敗し，人類が滅亡の危機に瀕し，“腐海”に怯えながら生活するという文明から見放された今の世界が出来上がったのである。再び無意識下の破壊的な攻撃性と向き合わなければならないことになった。その幕開けである。いったいこの破壊力を何に使おうというのであろうか。

飛行船団の襲来は，腐海から吹く風とともに秩序と調和を保ち，平和であった風の谷を根本から覆すものであった。

国王（父親ジル）は侵入して来たトルメキア兵によって殺される。現実の父の死に直面してコントロールを失った憎しみという攻撃的感情は，裏面の父に対する強い愛着の強さを表現していると考えられる。一方，ユパに示される現実を理解し善悪を明らかにし，判断することで物事に筋道をつけるという思考は男性性の重要な機能である。ナウシカは感情に支配された強い破壊衝動と物事を客観視する思考という現実認識機能に基づく善悪の判断の間で葛藤状況に立たされることになった。

風の谷は武装解除され，トルメキアの辺境派遣軍司令官クシャナ殿下は，集められた風の谷の住民に，「我らは辺境の国々を統合し，この地に王道・楽土を建設するためにやって来た。ソナタ達は腐海のために滅びに瀕している。我らに従い我らの事業に参加せよ。腐海を焼き払い，再びこの大地を甦らせるのだ」「かつて人間をしてこの大地の主となした奇跡と力を我らは復活させた。私に従う者は，森の毒や虫どもに怯えぬ暮らしを約束しよう」と言う。軍事国家トルメキアのクシャナは，腐海を焼き払うことによってこの地に王道・楽土が建設できると言う。それは，“焼き払う”という“火”による破壊と創造を主張する。風の谷を腐海から救うという英雄伝説とは似て非なるものになっている。英雄は，“青き衣を纏って金色の野に下り立つ”が，クシャナは「軍船に乗って辺境の地を征服するために降り立った」。そして，“失われし大地との絆を結ぶ”という予言に，「腐海を焼き払い，再び大地を甦らせる」と言う。また，“ついに人々を青き清浄の地に導かん”に，クシャナは「私に従う者は，森の毒や虫どもに怯えぬ暮らしを約束しよう」と言う。これは救世主としての英雄ではなく，征服者としての支配者である。腐海と手を結び共存するのではなく，腐海に敵対し滅ぼす立場である。そして既にそれを実現できる“火”を手に入れたと言う。それに引き換え，“風の谷”は“水”である。クシャナは救世主ではないことになる。

その時，前に進み出たオオババ様が「待ちなされ。腐海に手を出してはならぬ。腐海が生まれてより千年，いくたびも人々は腐海を焼こうと試みて来た。その度に王蟲の群れが怒りに狂い，地を埋め尽くす大波となって押し寄せて来た。国を滅ぼし町を呑み込み，自らの命が尽き果てるまで王蟲は走り続けた。やがて王蟲の骸を苗床にして胞子が大地に根を張り，広大な土地が腐海に没したのじゃ。腐海に手を出してはならぬ」と諫める。“火”によっては腐海を解決できないこと，かえって自分の身を滅ぼすことになることを老賢者の役割としてオオババ様は警告するのである。そして，ナウシカは自分の破壊衝動を抑え，犠牲者を出さないために一時の妥協を提案する。

トルメキア本国では巨神兵を早く運べと命じている。しかし，司令官クシャナはこの風の谷に巨神兵を使って独立国家を打ち立てるという野望を抱いている。そのためには，巨神兵を復活させることである。クシャナの言う奇跡と力の復活は巨神兵による武力によって成されるこ

とがわかった。果たして巨神兵は復活するのか。火によって世界は再生されるのであろうか。火によって世界が亡んだことを忘れたのであろうか。

風の谷を占拠し，巨神兵の復活の作業を見届けたクシャナはペジテに戻ることを告げ，ナウシカと人質5人と食料，さらにはガンシップも積み込みペジテに出発する。

巨神兵を載せて風の谷に墜落した巨大船が飛び立ったペジテでは何があったのだろうか。

3章．秘密の部屋と腐海

それより先，ユパがテトに案内されてナウシカの秘密の部屋に入って行く。それは，城の地下に作られた秘密の場所で誰も知らない。ナウシカがそこで何をしているかも知られていない。ナウシカは，秘密の部屋で腐海から集めてきた胞子で腐海の植物を育てているのである。もともとの目的は，父や住民の病気を治したいという思いから地下で腐海の植物を栽培していたのである。ナウシカが自分の秘密の部屋をユパに見せることになる。この部屋は誰にも，おそらく父親にも見せたことがないと思われ，心の構造から見てみると，普段は意識下に仕舞い込まれているようなコンプレックス[5)]といった個人的な無意識につながるようなものではないだろうか。ユパが隠し扉から城の階段を地下へと下りていく場面があり，その途中で見られた古ぼけた武具などはこの城の過去の外傷体験に彩られたコンプレックスと考えられる。それは，ナウシカのコンプレックスと重なり，今その苦しみに耐えられなくなった自己がユパに知られるという形で開示されている。しかし外界の状況は，コンプレクスを越えたもっと大きな，破壊的でコントロールの利かない力によって変わろうとしている。それに耐える力がナウシカにあるだろうか，今はなくてもその力を付けて行く努力ができるだろうか。この道は，自己実現と言われる道なのだが。

部屋の秘密が明かされる。

腐海の植物を育てる水と土は，さらに深い井戸の底から汲み上げたという，これは，地の底深くに流れる，誰の心の中にも流れているもう一段深い無意識の層[6)]から汲み上げたものと符合する。地表に出れば人を殺す毒となり，深い地の底では流れる川となって人を育てる腐海とは，意識の中で現実と関わる時，母を超えた母なるものといってもいいような無意識の領域で支えてくれるもののような感じを与える。実際に，ナウシカにとっては現実の母がいないこと，腐海の胞子を採取して秘密の部屋で育てることは，母を超えた母なるものに触れることであった。

一方，トルメキア軍はペジテに向かって，バカガラス4機とコルベット，人質と食料を積んだバージで飛び立つ。飛行の途中で，ペジテのガンシップ一機の襲撃を受け，バカガラスが次々と墜落する。ただ一機，ナウシカとクシャナが乗った旗艦だけになり，ナウシカはこれ以上の殺し合いを止めようと両手を広げての機外に立つ。パイロットはそれに向かって攻撃を仕掛けるが，飛行服を着たナウシカがブルーのワンピース姿に見え驚いていると，追尾していたコル

ベットに自らも攻撃され撃墜されてしまう。

父を殺された憎しみを越えて，ナウシカは憎しみの前に自己の身を曝し，攻撃や破壊では解決しないことを示すのである。戦闘服がワンピースに変わり，色もブルーであることがそれを補っている。

雲の下は凄まじい瘴気が渦巻いている。ナウシカは墜落するバカガラスからガンシップでクシャナを助けて脱出する。そして切り離されたバージを探しに腐海の上空に入り，発見し曳航しようとするが腐海に両船が不時着する。ここで，助けられたクシャナが拳銃を取りだし，自分の命令に従うように脅迫するが，ナウシカは「何を怯えているの，怖がらないで」「自分の国へ帰ってもらいたいだけ」「あなたは（クシャナ）何も分かっていない」と諭す。上空では大王ヤンマが飛行船が相次いで墜落したことで警戒し怒っている。その時，海の底から王蟲が侵入者を調べに上がってくる。それに気付いたナウシカは自分たちが害のないものであることを率先して示すために身を投げ出す。それに対して王蟲は，黄金の触手を出してナウシカを調べ始める。その時，ナウシカは陽に当たる懐かしい世界のイメージを王蟲の目の中に見る。そしてイメージは，大きな葉の茂った大木が現れ，それが王蟲に変身して終る。やがて王蟲は納得したようであるが，突然方向を変え，目を真っ赤にして，虫たちと一緒に森の奥へと群れをなしてどんどん進んで行く。

憎しみと争いの果てに，一番恐れていた瘴気渦巻く腐海に不時着してしまうのである。腐海は人が操作できるような世界ではない。ただ害のない自分であること，真実の自己を晒す以外にないことをナウシカは示す。腐海からのメッセージを素直に聴き取ることである。ナウシカには王蟲の目を通して予言された清浄の地が見えるのである。その象徴はまさに王蟲が青々とした大木に変身することに示されている。“木”は人が求める世界の象徴であり，“風の谷”そのものである。しかし，一方のクシャナにはそれが理解できない。理解できないような体験があるのだろうか。クシャナは女性でありながら，鎧に身を包み男性として振舞うのはなぜか。

ナウシカは，異変に気付き，爺達に先に風の谷に帰るように指示し，自らはメーヴェに乗って王蟲や虫たちの向かう方に飛び立つ。向かう先では，先程トルメキアのバカガラスを攻撃し，自らも撃墜されたペジテのガンシップのパイロット（若者）がミノネズミと機関銃で戦いながら森の奥へと後退している。ついに崖っ淵に追い詰められ墜落する。下にはヘビケラが飛んでおり，あわや挟み殺されそうになった時，メーヴェに乗ったナウシカによって危機一髪救われる。しかし，ヘビケラから逃れるのは難しく尻尾がメーヴェに当たり腐海の底に若者と共に墜落し意識を失う。若者は意識を失ったナウシカを助けようとするが，共に流砂に呑み込まれ，もう一つ下の世界に落ちることになる。

ここにもう一人の若者が登場する。ナウシカは若者と共に腐海に落ちるが，更に流砂に呑み込まれるとはどういうことであろうか。ナウシカが落ちていく時，或いは降りていく時は一人ではない。秘密の部屋ではユパ，今度はアスペルと，共に男性が一緒である。また秘密の部屋

の水と土の秘密が明かされるのであろうか。腐海が示す象徴がナウシカの精神世界と考えると，階層状になっている腐海は心の層構造に対比されるかもしれない。

ナウシカは気を失っている間に夢を見る。そこは，パステルカラーの色褪せた世界で，寂しく不吉な印象を受ける。黄色い野原で一人ナウシカが遊んでいる。年齢は3，4才にみえる。そこに馬に乗り兵を連れた父親がやってきて「ナウシカ，ナウシカ」と呼び掛ける。なぜか，皆，元気がなく葬送の列のように歩いて行く。母親も馬に乗っているが悲しみに打ちひしがれたような表情である。声もくぐもっており，死人のような感じである。場面が変って，ナウシカは父親の馬に一緒に乗っている。父は中世の騎士のように腰に剣を差している。暫くすると，ナウシカは父がどこに行こうとしているのかを悟り，「そっちに行きたくない」と言う。そして，大木の前に立ち「何も居ない」と大木に背をくっつける。その時両足の間から王蟲の子供が現れる。ナウシカは必死に庇うが，父親は「やはり虫に取り付かれていたか」「虫と人とは同じ世界には住めないのだよ」と言って虫を取り上げ連れていく。ナウシカは「お願い，殺さないで」と泣く…。ここで夢が覚める。

ナウシカの夢。全体が暗く，戦(いくさ)の後の落武者のような印象を受ける。新しい土地を求め落ち延びて行く途中で，決して希望を抱けるようなものではない。この後の放浪の末に，風の谷に辿り着いたのであろうか。しかし，その旅で，母親は亡くなり，ナウシカはその時から王蟲を友達として育ち，王蟲が大木と共にあることが示されている。しかし父は，“王蟲と人は同じ世界に住めない”として，王蟲を取り上げてしまう。夢では示されていないが，これが現実の母親の死，そして父自身が腐海の毒にやられることになったのではないか。簡単に触れてはいけないものに触れたのであろうか。ナウシカはここで目覚めるが，この後，この触れてはいけないものとどうかかわっていくのであろうか。

ナウシカが目覚めた場所は腐海の底であった。流砂と一緒に落ちて来たのである。そこにメーヴェを担いだ少年が現れ，アスペルと名乗る。腐海の底は，空気が澄み，清らかな水も流れている。ナウシカは枯れても立ち尽くす木を見て「何て立派な木」と独りごとを言いながら木の幹に体を寄せる。そして，その幹に耳を寄せた時「(大木が) 枯れても水を通している」ことを知る。そして，「石になった木が砕けて降り積もっている」ことが分かり，「井戸の底の砂と同じ」であることに気付く。ナウシカは腐海の底の砂に身を投げだし，俯せになって静かに泣いている。「嬉しい」(懐かしい) 母の感触を大木が砕けてできた砂の大地から感じ取るのである。

ナウシカは，遂に腐海の底に至った。ここで，自己の心の一番深い部分に触れることになる。そこは，水の流れと巨大な木の切り株や丸太が転がっている，全く人間臭さを感じさせない無機質で無彩色な世界である。枯れていながら生きている木によって支えられている。木の象徴するものは，そして清浄な水が意味するものは一体何であろうか。それは，懐かしい母のイメージを抱かせる。ナウシカを体ごと受け止めてくれるような広くて深い“母なるもの[7)]”の存在

である。ナウシカは母の懐の中に抱かれたような安心感に包まれて眠る。物語りの中では最も平和な時であるが，快楽や欲望，感情，思考といった自我機能が働く外界とは隔絶した，また，個人的なわだかまりも超越したかのような世界である。人間世界ではない。だが，既にナウシカは秘密の部屋で水を汲み上げていた井戸を通して，この母なるものにつながり，それを自分の中に取り込んでいたのである。

ここで，ナウシカは腐海が生まれた訳を悟ることになる。ナウシカが言う「腐海の木々は，人間が汚したこの世界を綺麗にするために生まれて来たの。大地の毒を体に取り込んで，綺麗な結晶にしてから，死んで砂になっていくんだわ」「この地下の空洞はそうしてできたの」「虫たちはその森を守っている」。それに答えて，アスペルは『だとしたら僕らは滅びるほかなさそうだ。何千年かかるか分からないのに，瘴気や虫たちに怯えて生きるのは無理だよ』『せめて腐海をこれ以上広げない工夫が必要なんだ』。「クシャナと同じように言うのね」とナウシカが応じる。『僕たちは巨神兵を戦争に使う積もりはない。明日，皆に会えば分かるよ』。

そして，ここで分かった腐海という“母なるもの”が木となって，人間の意識が生み出す大地の毒という不安や恐怖を受け止めてくれる。しかし，人間が生み出す，果てしのない肥大化した不安や恐怖は着々と人を蝕み，正常な人間の営みを続けることを困難にしている。

ここで，アスペルは，“だから，不安や恐怖によって肥大化した腐海を，これ以上大きくしない工夫が必要だと，そのために巨神兵を遣うのだ”と言う。“それは，クシャナと同じだ”とナウシカは応えたのである。

一方，風の谷では巨神兵の復活に向けて作業が進んでいる。

人質4名が帰還し，囚われの身となったクシャナは酸の湖の岸にある廃船に幽閉される。ユパがクシャナに，巨神兵を酸の湖深く沈めて本国へ帰るように説得するが，クシャナは「巨神兵には火も水も効かぬ，歩き出すまでは動かすこともない。最早，後戻りは出来ないのだ。巨大な力を他国が持つ恐怖により，私はペジテ攻略を命じられた。奴の実在が知られた以上列国は次々にこの地に大軍を送り込むだろう。お前たちに残された道は一つしかない，巨神兵を復活させ，列強の干渉を排し，奴と共に生きることだ」と答えるのみである。

クシャナは，戦争の種になる巨神兵を再び人間世界に現われないように消滅させようというユパの提案を受け入れない。巨神兵に象徴されるものは過去の憎しみであり，癒されない攻撃欲である。一度過去の世界から意識化されると“火”も“水”も利かない。その攻撃性を利用して課題を解決しようとする破壊からの創造を目指す，他の道はない，力には力で対抗する以外になく，その破壊と共に生きることだとクシャナは言う。しかし，それはペジテ攻略によってトルメキア軍もペジテも崩壊し，人が住めない不毛の地と化したことを認識せず，次に風の谷に向かうのである。（人類が共に生きるのは巨神兵であって腐海ではないと言うのである。）

そして，クシャナは自分の右の義手を外して見せる。「腐海を焼き虫を殺し，人間の世界を取り戻すのに何をためらう。我が軍がペジテから奪ったように奴を奪うがいい」。それに対し

て，ユパは「巨神兵は復活させぬ」と断固とした決意を述べる。そしてガンシップでナウシカを救出に向かうのである。

クシャナが自己の外傷体験を示してまでも力による人間世界の復活に固執する。腐海（簡単に触れてはならないもの）から受けた傷（憎しみや恨み）を癒すために，力による挽回を試みる。それに対して，ユパは力では癒されないことを断言するのである。

風の谷では，墜落した飛行船によってもたらされた腐海の胞子が森に広まる。オオババ様は「燃やすしかないよ。もうこの森は駄目じゃ」「手遅れになると谷は腐海に呑み込まれてしまう」として，森を焼くように指示する。村人は，『貯水池を300年も守ってくれた森じゃ』と落胆の思い。クシャナが廃船から脱出する。

クシャナは女性であるが，それを否定するかのようなに甲冑に身を包み，感情よりも思考が優位の行動原理に従って行動する。それほどまでに彼女を力至上主義に駆り立てるものは何であろうか。右腕の喪失に見られるような外傷体験とその癒しを求めての復讐が原因なのであろうか。ナウシカとは全く違った対極に位置し，それは腐海を挟んでの対決となる。火によって腐海を焼き払うことで王道・楽土を作ろうとするクシャナと腐海の水と風に調和することで人が住める土地を作ろうとするナウシカの対決である。

4章．ペジテの葛藤

ナウシカとアスペルがメーヴェに乗ってペジテに向かう。下界には「虫たちがいない」。しかし，ナウシカには異変が察知され，なぜか「こんなに胸がドキドキする」。ペジテでは，占領したトルメキア軍と虫の死体が累々と横たわり，町が廃墟になっている。センタードームが王蟲によって食い破られ，トルメキア軍も全滅した。王蟲も死に，何れはその骸から毒の胞子が根を張りペジテも腐海に没する運命を辿ることになる。アスペルが『ペジテはもう終わりだ……。トルメキア軍を全滅させたって，これじゃ……』と言うのを聞いたナウシカは，「“全滅させた”，どういうこと？」と聞き返す。その時，アスペルの仲間のペジテのブリッグが現れる。アスペルはリーダーに『なんてことをしたんです。あれじゃ，ペジテの再建はできない』と詰め寄るが，『大丈夫，腐海に呑み込まれても焼き払える』『作戦の第二段を発令した。今夜にも風の谷のアルメニア軍は全滅だ』と言われ，事態を察知して，アスペルが『虫に襲わせるんだ』（ペジテを襲わせたのもペジテ人自身）。リーダーは『どうあっても復活する前に，巨神兵を取り戻さなければならないのだ。世界を守るためなんだよ，分かってくれ』。それを聞いていたナウシカは「風の谷の人達を殺すわけ」「止めて」「お願い」と詰め寄る。リーダーの答えは，『走り出したら，誰も止められない』『トルメキア軍に我々はほとんど殺されてしまった。他に方法はない』『今は辛くても，巨神兵を取り戻せば腐海を焼き，人間の世界を取り戻せるのだ』。ナウシカとリーダーの間で「うそだ，あなた達はトルメキアと同じよ」『違う，彼等は破壊に使うだけだ』「あなた達だって井戸の水を飲むでしょう。その水を誰が綺麗にして

いると思うの。湖や川も人間が毒水にしてしまったのを腐海の木々が綺麗にしてくれているのよ。その森を焼こうと言うの。巨神兵なんか掘り起こすからいけないのよ」『ではどうすればいいのだ。このままトルメキアのいいなりになるのか』と言い争いになる。最後に，ナウシカがアスペルに「アスペル言って，“腐海の生まれた訳を，虫は世界を守っている”って」。アスペルはナウシカを解放しようとするが，結局はブリッグに拘束される。

ペジテはトルメキア軍との戦いに敗れ，挽回するために王蟲を使ってトルメキア軍を襲わせ全滅させた。しかし，同時にそれはペジテも自滅する道であり，腐海に沈むということを意味している。争いの結果は共に破滅しかないということ，そして，トルメキアとペジテは巨神兵という“火”の原理（破壊）によって自己の世界を復活させようとする点で共通していると言える。それは，木に象徴される“水”の原理によって世界を守ろうという風の谷とは対立するものである。それは"腐海"に対する知的な理解を中心とする力による強いものを良しとする父性原理と情緒的な感性を中心とする共感による共存を良しとする母性原理の対立と考えることもできる。

風の谷では村人とトルメキア軍の対立が始まり，ナウシカが帰ってくるまで，村人は酸の湖のほとりの廃船に避難することになる。風の谷にとっては“森を守る戦い”である。

クシャナが風の谷に帰ってくる。

ナウシカはペジテのブリッグに囚われの身となっていたが，女性と少女に助けられる。その女性がアスペルの母であることを知り，思わず「母様」と呟き抱き付き，母もそれに答える。そして，少女と服（胸に“海亀”のマークが入った濃いピンクの服）を取り替えメーヴェで脱出する。アスペルの『谷を救いに行ってくれ，僕らのために行ってくれ』という願いを後に，メーヴェが青空に飛び上がる，それを追うコルベット。そこにユパが乗ったガンシップが現れ，ナウシカを助け，ペジテのブリッグも救出する。ナウシカはガンシップに乗り移り，「風の神様，どうかみんなを守って———」と念じながら，全速力で風の谷に戻ろうとする。

ナウシカはアスペルの母に現実の母を感じる。これはナウシカが夢の中で自分の幼児期の体験を想起し，王蟲との関わりの原点にまで遡って生活史を想起する一方で，腐海の底にまで降りる体験から自己の深い無意識の世界からのメッセージに触れるという縦横の体験を経て現実感を取り戻し，目の前にある課題に対処しようという構えの完成を感じさせる。世界は破滅に向かっており，人以外の動物は見られない。胸の海亀のエンブレムは失われた世界の象徴であり，海は酸になり海亀も既に死に絶えている。ナウシカが大空をメーヴェに乗って悠然と飛ぶのと同じように，かつて海亀も大海を悠然と泳いでいたことが思い合わされる。海亀のエンブレムは失われた大海への鎮魂歌となっている。

5章．ナウシカとクシャナ

廃船に避難した風の谷の村人とトルメキア軍が対峙する。村人が立て籠もった廃船は火の7

日間の前に造られ，星まで行っていた。戦車の砲でも歯が立たない頑丈なものと言われている。

村人は，ナウシカが腐海からガンシップで戻ると信じて帰ってくるのを待っている。クシャナも，『私も待ちたいのだ，本当に腐海の深部から生きて戻れるものなら』『あの娘と一度ゆっくり話しがしたかった』。

何もかも腐らせる腐海から生還できるわけがない，あくまで腐海は人間世界に対立するものであるというクシャナの強固な思いを示している。

クシャナが捕虜となった村人に降伏を勧めると，村人は腐海の毒に当たり，あと半年で石になってしまう手を示し，「ナウシカは“好きだ”，“働き者の綺麗な手だ”と言ってくれた」。それを聞いて，クシャナは『腐海の毒に犯されながら，それでも腐海とともに生きると言うのか』と呆れる。村人は「あんたは火を使う。そりゃあ，わし等もちょびっとは使うがのう」「多すぎる火は何も生みやせん。火は一日で森を灰にする。水と風が百年掛けて森を育てるんじゃ」「わし等は水と風の方がええ」「あの森を見たら姫様悲しむじゃろうのう」と答える。それを聞いて，クシャナは村人3人を釈放し，1時間後の攻撃を決心する。

ここには，村人の言葉から‘火’と‘水’の本質が示されている。これはまた，クシャナとナウシカの腐海に対する態度の違いを物語るものでもある。

解放された村人は，「風がない」「風が止まった」ことに気づく。そして，避難していたオオババ様も「誰か私を外に連れてっておくれ」と異変に気付くのである。風が止み，耳が痛くなるような振動がする。「大地が，大地が怒りに満ちておる」。

風は知らせであり，予兆である。以前に“風使い”“風を読む”“風が臭う”などといった表現がある。その風が止むということは，風の谷の根底がひっくり返るようなことが起こる前兆であり，ついに母なる大地が揺れるのである。オオババ様は“大地の怒り”と予言した。

ナウシカの帰還を待っていたクシャナは『所詮，血塗られた道だ』と，遂に攻撃を開始する。そこにガンシップが帰還し，クシャナは攻撃を止め，『あの娘はどうした』と様子を聞く。「姫様は？」。それに対して，「王蟲だ，王蟲の群れがこっちに来るぞ」「姫様は暴走を食い止めるため一人残られた。戦などしている場合ではない。皆，高い所へ逃げろ」。向かってくる王蟲に向かい，オオババ様は「こうなっては誰にも止められないんじゃ」，そして村長が「姫様が諦めない限り，諦めるな」と励ます。

綺麗な水を供給し，人間世界を支えている母なる大地を怒らせてしまった。果してナウシカは大地の怒りを鎮めることができるであろうか。どのような行動をとるのであろうか。

風の谷とトルメキアの対立は，水と火の対立，森に対する戦車，育てる世界と壊す世界，和と力の対立であり，運命を受け入れようとする世界と運命を切り開こうとする世界，人を信じる世界と信じない世界の対立である。風が止み，“水”と“火”の対立を超えた，両者を支える“地”が今怒りを発しているのである。最早人智の及ぶところではない。クシャナは己の信じた火による殺戮の道（滅び）を選ぶ。ナウシカは自己の信じる生の道を求めて，大地の怒り

を鎮めようとする。老賢者のオオババはナウシカであっても無理なことであると予言する。

王蟲の暴走を見て，クシャナは巨神兵を使うことを決心する。早すぎるとの諌めにも，『今使わずに何時使うのだ』と，復活していない巨神兵を連れに行くのである。クシャナは大地の怒りにも火で対抗しようとするが，成功するだろうか。

一方，ナウシカは，ガンシップで帰還する途中，大地を走る王蟲の大軍を見る。「腐海が溢れた，（王蟲が）風の谷に向かっている」「なぜ。どうやって王蟲を（走らせたか）？」。前方にシリウスの光が見え，「誰かが王蟲を呼んでいる」。照明弾の中に王蟲の子供を吊したペジテのポットを発見する。「あの子（傷付いた王蟲の）を囮にして群れを呼び寄せているんだ」。王蟲の子供を殺すと暴走は止まらない。王蟲の子供を群れに返すことを考え，ナウシカはメーヴェに乗換え救いに行く決心をする。

ナウシカは王蟲の子供を救おうとポットの兵を説得するが，逆に撃たれるため，ここでも無抵抗の意思を示しメーヴェの上に立ち両手を横に開いて突進する。しかし，左肩と右足を撃たれる。結局，ポットが王蟲の子供と共に中洲に不時着し，人間の酷い仕打ちを詫び，傷付いた王蟲の子を宥める。しかし，王蟲の子供は理解できず，傷付いたまま酸の湖に向かって動き出す。それをナウシカが必死で止めようとするが，動くと青い体液が傷口から流れ出る。ナウシカのピンクの服が徐々に青く染まって行く。

両手を広げ，無抵抗で攻撃を制止させようとするのは二度目である。

6章．大地の怒り

ペジテの作戦通り，王蟲の群れが傷ついた王蟲の子供に気付いて突進してくる。王蟲の子供の目は赤く怒りに満ちている。ナウシカは王蟲の子供を押し止めようとして酸の湖に自分の傷付いた右足を浸けてしまう。王蟲の子供は突進を止め，ナウシカは激しい痛みを感じ中洲に身を投げ出すと，王蟲の目が赤から青に変わり，ナウシカの傷口を調べ始める。ナウシカと王蟲の気持ちが通じる場面である。それを見て，ナウシカは王蟲の子供を群れに帰そうと決心する。「私たちを群れの先に下ろすだけでいい，運びなさい」と，ペジテの兵に迫る。

王蟲の子供の我を忘れた怒りをナウシカは自分の身を捨てて慎めようとする。その自己犠牲こそ相手の気持ちを動かすことが出来ることを示した。さらに暴走を止めるには，怒りに狂う王蟲の群れの前に自分の身を晒すことでしか残された道はない。

怒りで我を忘れた王蟲の群れは風の谷に向かっていたが，トルメキア軍の砲撃によって，廃船の方に逆に引き寄せられることになった。廃船では村人達がじっと成り行きを見詰めている。「ババ様，皆死ぬの」『“さだめ”ならね』。王蟲の群れが突進してくる。定めには自己犠牲しかない」。

トルメキア軍は壊走しそうになるが，この時，巨神兵を連れたクシャナが現れる。しかし，巨神兵は復活が早すぎて，体が腐って行く。クシャナは『焼き払え。どうした，それでも世界

で一番邪悪な生き物の末裔か』と攻撃を命じる。巨神兵は火炎を噴射し焼き払おうとするが，焼き尽くすことができず，巨神兵自らが朽ち果てるのである。それを見ていた村人は，「巨神兵，死んじゃった」。オオババ様が『その方がいいんじゃよ，王蟲の怒りは大地の怒りじゃ』。『あんなものにすがって生き延びて何になろう』と答え，迫りくる王蟲の群れをじっと見ている。

結局，火による力は自滅し，大地の意志に沿って生きる以外にないこと，火の奴隷となって生きるより，死を受け入れ滅びの運命を受け入れることを預言者としてのオオババが示した。

そこに，ナウシカがポットに王蟲の子供を吊り下げて，迫る王蟲の群れの眼前に下り立つ。怒りに狂った群れはナウシカを空高くはね飛ばし，戦車もガンシップもはね飛ばし，村人が避難している廃船に激しくぶつかる。それでも群れは止まらず暴走を続ける。空には，ペジテの人々やユパが乗ったブリッグが風の谷に向かって飛行中で，眼下の王蟲の群れに気付き，やがて王蟲の目が青く変わるのを発見する。終に，群れが止まる。王蟲の攻撃色が消え怒りも消えた。

ナウシカは強い意思と実行力で運命を切り開こうとする。しかし，一度動いた運命の歯車を容易に止めることは出来ない。大地の怒りの前にはただ身を呈し，命を晒すしかない。そして，ナウシカは空高く跳ね飛ばされて“死ぬ”のである。そのことによって，遂に大地の怒りが慎まる時がやってくる。

7章．英雄伝説

オオババ様が『大地から怒りが消えた』『(ナウシカが) 身を持って，王蟲の怒りを鎮めて下されたのじゃ。あの子は谷を守ったのじゃ』と。怒りの消えた王蟲が傷付いたナウシカを囲み，黄金の触手を延ばし，ナウシカの体を空中高く持ち上げる。すると，小さな光の球が空から降って来て，周りが光に包まれ，ナウシカの足と肩の傷が触手によって癒される。

大地（腐海）は火も水も呑み込み，人間世界の宿命が如何なるものかを怒りをもって示した。それに対して人間ができることは，オオババ様の言う宿命を甘受することではあったが，ナウシカは自己の“死”によって全ての人間を救おうとした。一方，大地は人の“生死”も思いのままにできる存在であり，到底人間の敵うところではない。しかし，このナウシカの犠牲に大地は報い怒りを鎮め，ナウシカも大地によって再び“生”を得た。

ナウシカが黄金の野原を両手を広げて歩く姿が認められる。それを，風の谷の村人，ペジテの住民，トルメキア軍等すべての人々が見ている。ナウシカは元気になった王蟲の子供を見て「よかった。王蟲ありがとう」。オオババ様が『奇蹟じゃ』『何と言う労りと友愛じゃ。王蟲が心を開いたのじゃ』と。そして，ナウシカは真っ青な異国の服を着て，金色の草原を歩いている。『その者，青き衣を纏いて，金色の野に下り立つべし』と，オオババ様にはあの敷物の上隅に描かれた古き言い伝えの人物が見える。『古き言い伝えは誠であった』。

宿命が変わることは奇蹟であり，大地による奇蹟が起こった。そして，ナウシカは古き言い伝えの人物（英雄）として出現した。宿命に立ち向かい，死の体験をし，人々の心の中に刷り込まれる時，その人は英雄になる。

風が戻って来る。メーヴェがひとりでに空を舞う。王蟲は森に帰り，村人達はナウシカと抱き合って喜ぶ。王蟲の体の色が金属的な色から褐色に変わって，虫らしくなっている。

巨神兵は骨になり，トルメキア軍は本国に帰る。風の谷では新しく井戸を掘り，木を植える。村人は風を楽しみ，ユパとアスペルは腐海の探検に向かう。腐海の深部には忘れられた飛行帽と幼木が見られる。

風の谷は救われた。王蟲は死なず骸にもならず，谷は腐海に沈むことはない。再び風と水に守られ再生されるのである。

参考文献

1）日本経済新聞　H.13.7.15

2）宮崎駿　「風の谷のナウシカ」　ジブリがいっぱい　collection 3

3）宮崎駿　「風の谷のナウシカ」アニメージュ・コミック・ワイド版　徳間書店

4）河合隼雄　「ユング心理学入門」培風館　p.170

　C. G. ユング著　林義道訳「元型論」紀伊國屋書店　p.77～85

5）河合隼雄　前掲書　p.64～88

6）河合隼雄　前掲書　p.89～95

　C. G. ユング著　林義道訳　前掲書　p.10～28

7）河合隼雄　前掲書　p.91

　C. G. ユング著　林義道訳　前掲書　p.127

宮崎駿：風の谷のナウシカ　1～4　徳間書店　1990年

山中康裕；「病の意味」　精神療法　Vol. 30　No. 4　2004

岸本寛史；「癌と心理療法」　誠信書房

岸本寛史；「緩和のこころ」　誠信書房